

# 所 信 表 明

令和元年 10 月 3 日

長久手市長 吉田一平

## 【はじめに】

令和元年第3回長久手市議会定例会の開会にあたり、市長3期目就任のごあいさつを申し上げますと共に、今後の市政運営につきまして、私の基本的な考え方を述べさせていただきます。

平成23年9月18日に長久手町長に就任以来、市制施行を経て現在に至るまで、長久手市政の発展のため市民の皆様、議員の皆様のご指導とご支援をいただき、これまで多くの事業に取り組むことができました。これもひとえに先人の方々が長年築きあげてこられた郷土の歴史と、市民の皆様と共に進めてきましたまちづくりの成果であり、心からこの8年間のご支援とご協力に感謝申し上げます。また、市民の皆様と共に新しいまちづくりに果敢に取り組む市職員の皆さんにも心より感謝しています。

この度の市長選挙におきまして、市民の皆様からのご信任を賜り、<sup>みたび</sup>三度、長久手市政の運営に当たることになりましたことは、極めて光栄なことであり、同時にその責任の重さを痛感しています。市民の皆様、議員の皆様、市職員の皆さんと力を合わせて、より良い長久手市をつくりあげるという強い決意で臨んでまいります。

## 【基本理念 つながり ～次世代のために～】

私は、市長の責務は、現在の市民に対してはもちろん、子ども達、さらにはこれから生まれてくる、まだ見ぬ子ども達へ、より良い長久手市を継承していくという次世代への責任もあると思っています。従って、今の子どもたちが、大人になったとき、「国が悪い」、「社会が悪い」と他人事にするのではなく、自分達で考え、自分達で変えていくことができる「市民が主人公のまちづくり」の基礎をつくりたいと考えています。

私が、長久手町長として初登庁した平成23年9月20日は、台風15号のため朝から大雨で、災害対策本部が立ち上がりました。午前11時から正午までの1時間で約50ミリの豪雨となり、一軒が床下浸水したほか、水路の

一部が排水困難となり、非常配備で対応にあたる職員は総出で取り組んでいました。

これは昼間の出来事でしたが、「真夜中に大災害が発生した場合、職員は何人来られるのか」、「職員だけで対応できるのか」と私は不安を覚えました。

市長には、市民の命を守る責任があります。しかし、市長と約 420 人の職員だけで、市民 6 万人の命は守れません。南海トラフ地震等の大災害が発生した時、地域でできることは地域で支え合っていただく必要があります。

そのときに、どうしても必要なのが、人と人とのつながりです。

災害時だけでなく、困っている人がいたら、当たり前前に声を掛ける、互いに支え合うことができる長久手を次世代に渡したいと思います。時間がかかっても、時間をかけてでも、次世代のために、つながりをつくっていききたいのです。

どうしたら、互いに支え合うつながりができるのか。

特効薬はありません。お金を支払えばできるものでもありません。しかし、今から始めれば、10 年後、20 年後には、つながりがある長久手になると確信しています。

この 50 年間で失ったつながりを、もう一度、作り直すことは、今を生きる私たち大人にとっては、面倒で苦勞が多いことです。しかし、その苦勞の末に生まれたものは、必ずや未来の子ども達の大きな財産となり、地域の人々が集いつながり合うふるさとの風景は、長久手をさらに素晴らしいまちへと導く強力な推進力になるのです。

### **【基本理念 あんしん ～早さ、効率を重視する時代からの転換～】**

戦後の日本は、物質的な豊かさや快適さを求め、早さや効率的であることが重視され、目標に向かって一目散に走ってきました。生産性のないもの、成果があがらないものは、「無駄なもの」として切り捨てられてきました。私たちは、便利で快適な生活を送るうちに、「何でも自分の思いどおりになる」と勘違いし、その勘違いから他人に対して厳しくなり、不寛容な社会を

作り上げてきました。

早さや効率が重視され、一度失敗すると、立ち上がれないほど叩きのめすような不寛容な社会の中で、ひずみが生じ、引きこもりや虐待、心の病、不登校、家庭内暴力、自殺、認知症、老老介護、孤立死等の問題が深刻化してきたように感じます。

こうした問題は、長い人生の中で、誰にでも起こり得ることです。誰にでも起こり得ることだからこそ、「社会が悪い」、「家庭が悪い」、「行政や専門家で解決すべき問題」で済ますのではなく、私たち一人ひとりが、我が事として地域全体で考える必要があると思います。

平成 30 年 4 月、地域共生社会の実現に向け、社会福祉法が改正されました。その中で、支援を必要とする住民が抱える多様で複合的な困りごとは、行政や専門家だけでなく、住民も「支え手」、「受け手」という関係を超えて連携し、解決を図ることを目指すと位置付けられました。

現実には、行政による対応は、家族からの相談や近所から心配する声が寄せられてから始まることがほとんどです。本人や家族が誰にも言えず、どこに相談したら良いかも分からずに困っていることを、周囲の人が気付ける人間関係を築き、まずは地域や行政とその情報を共有していただきたいと思います。

今年 6 月、70 代のある省庁の元事務次官が、引きこもりがちだった 40 代の息子を殺してしまう事件がありました。元事務次官は、息子のことを長年悩みながらも、誰にも相談していないようでした。元事務次官は、言うなれば、これまでの生産性や成果を求めてきた時代の勝者です。同じ時代を生きてきた人の多くが、子育てや地域という日々の暮らしからは距離を置き、「職場に引きこもっていた」と言えるかもしれません。

団塊世代が後期高齢者となる 2025 年問題を見据えると、高齢男性を中心にした人達が、地域に戻り、地域の一員として活躍するための仕組みづくりが必要不可欠だと強く感じます。

大人達が、地域の一員として活躍する姿は、次世代を担う子ども達に必ず

影響を与えます。「ながくて未来図（第6次総合計画）」で目指す、2050年には、あらゆる世代の市民がまちづくりに関わるのが当たり前になり、まちづくりの中心に市民がいる長久手になるよう、その基礎づくりを進めてまいります。

### 【基本理念 みどり ～世界に新しいメッセージを～】

2022年秋、愛知県が、モリコロパークにおいてジブリパークを開園します。半年間の愛知万博とは違い、ずっと存在する恒久的な施設です。従って、開園により、長久手に新たな活気が生まれることが期待されます。一方で、懸念される交通対策等の課題は、愛知県と十分に調整を図ってまいります。

私の中にあるスタジオジブリの作品の印象は、「普段の暮らし」、「人と人が関わることで感じる幸せ」、「自然の大切さ」、「不便なこと、思い通りにならないことを受け入れたり、乗り越えたりして成長する姿」を描いている作品が多いように感じます。そんな「普段の暮らしの大切さ」を、ジブリパークと長久手から広く発信できたらと思っています。

そしてジブリパークの地元市としてふさわしく、訪れる人ともあいさつを交わし、関わり合い、自然・みどりがあふれる長久手にしていきたいと思えます。

### 【行政の役割】

人口が増加する時代、日本中において、需要が高い子育て、学校関連施設等の公共施設をスピード感を持って充実させてきました。住民に意見を聞く間も惜しんで、早く整備することが、人口増加時代に求められたまちづくりでした。

本市においては、今後もしばらく子育て世代を中心に人口増加が続くため、子育て、学校関連施設は、市民に十分意見を伺いつつも、タイミングを逃すことなく整備を進めていきますが、つながりづくりのために必要な施策や施設は、行政だけで決めず、市民の皆様と相談して進めていきたいと考えます。

これまでの 8 年間、試行錯誤して前に進んできました。

市民の皆様にも、目指すまちづくりの方向性をご理解いただき、多くの参加を得て、共に汗をかきながら前に進んできました。その成果の一つとして、昨年 7 月、前文に「とことん話し合うことを大切にする」ことを謳った、「長久手市みんなでつくるまち条例」を施行することができました。

とことん話し合い、課題の解決に向けて共に取り組むためには、市政が目指す方向を市民及び議会の皆様に対して、しっかりとお伝えする必要があります。

「みんなでつくるまち条例」の中で、市民の権利として「市民は、まちづくりに関する情報を知ることができます」、市政運営の基本原則として「わかりやすく、かつ積極的な情報提供及び説明に努めます」とあります。情報共有を進め、職員はまちへ出て市民と膝を突き合わせて話をすることで、市民の皆様がまちづくりに関心を持ち、参加するきっかけとなるよう一層努めてまいります。

情報を共有し、共に悩み、共に苦しみ、共に行動することの積み重ねが必要だと考えますが、市民の市政や自分が暮らす地域への関心は、決して高いとは言えません。そんな中、一人でも多くの方に、関心を持っていただき、参加していただくためには、「互いに知り合うこと」、「参加を待つこと」、「多様な意見を互いに認め合うこと」が大切です、必然的に時間がかかります。敢えて時間をかけてでも、そうしたことを繰り返し、積み重ねていくうちに、人と人がつながり、次の時代にはもっと評価される長久手に変わっていくはずです。

もちろん、市役所の業務の中には、迅速さ、正確さが求められる業務もあります。そうした業務と、つながりづくりのために市民の皆様と共に時間をかけて取り組む業務は、区別し、メリハリを持って取り組んでまいります。

## 【結び】

誰もが、かけがえのない存在として、誰一人取り残さないまち、役割と居

場所のあるまちを実現したいと考えます。

誰一人も取り残さないための第一歩は、相手に寄り添い、とことん話を聞くことだと私は思います。話を聞く側の価値観で、将来ばかりを気にして先へ先へと追い立てるのではなく、その人の存在そのものを認め、待つことができる、もっと大らかに暮らせるまちを皆さんと一緒につくっていきたいと思っています。

そのためには、人が育ち、まちも育つ必要がありますが、それには長い時間がかかります。時間がかかっても、次世代にとっても、より良い長久手市を継承していくために、時間をかけてでもチャレンジしていかなければならないと私は信じています。

今年は、日本でラグビーのワールドカップが開催されています。ラグビーの精神は ワン フォア オール **One for all** , オール フォア ワン **All for one** といわれます。一人ひとりが、みんなのために自分に与えられた役割を果たします。一人の失敗や弱点は、みんなでカバーします。

市民、議会、市役所それぞれの役割を活かして、すべての人が役割と居場所を持ち、**誰一人取り残さない**、「幸せを実感できる共生のまち長久手」を、力を一つにしてつくっていきます。

議員の皆様をはじめ、市民の皆様方におかれましては、私の市政に対する熱い思いをお汲み取りいただき、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、3期目の市長就任にあたりましての所信といたします。

どうぞよろしく願いいたします。

令和元年 10 月 3 日

長久手市長

